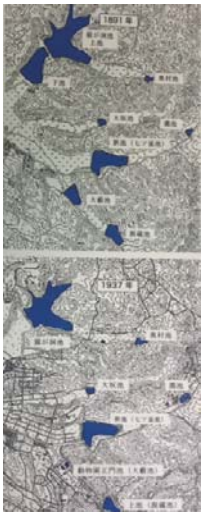
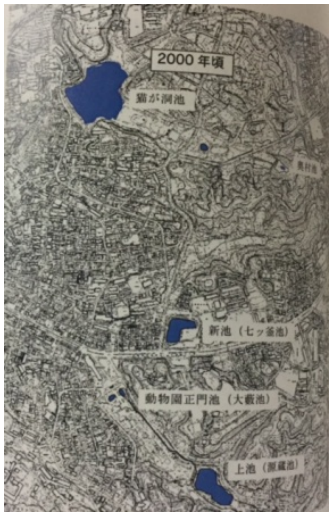
名古屋東山「新池」(続)

写真は『名古屋・東山新池ため池調査報告書 2007』。山崎川水系の源流には三つのため池が存在する。猫ヶ洞池(1664 年 寛文 4 年)、東山新池(1702 年 元禄 15 年)、上池(1801 年 享保元年)、いずれも尾張藩の直轄造成事業であった記録がある。新池は、江戸時代の頃は「七ッ釜池」と呼ばれていた。元禄 10 年に、藩主(光友)が猫ヶ洞池の水を大曽根の別邸(現在の徳川園あたり)に引くため、その替え地として造られた。





写真左上が 1891 年、下が 1937 年、右が 2000 年頃。新池は真中すこし下にある。古い地図によると、新池は昭和の初期までは広大な広さがあった。その後、埋め立てがすすみ東山スタジアム(1948 年)ができ、その跡地に愛知県立東山工業高校(1959 年)や千種スポーツセンター(1998 年)が建設されてきた。70 年代以降、市東部の開発に伴って、新池は 1984~87 年の約 3 年間、雨水貯留事業として護岸・浚渫工事が実施され、現状の姿となった。

ため池がなくてはならない水利施設として活躍していた時代、非灌漑期である冬季に水が抜かれて、「かいのぼり」が毎年行われていた。水位が下がっていくと、池の底部近くに寄り集まったコイやフナなどの魚がパシャパシャとしぶきを上げる。日本の稲作地帯の風物詩であり、捕まえた魚は貴重な動物性たんぱく質として食卓に上った。底にたまったヘドロはくみ上げられて肥料として利用された。干しあがった池では、堤防の点検や補修も行われた。

生物多様性条約第 10 回締約国会議、COP10 開催を前にして、東山新池のかいのぼり事業が 2007 年に実施された。市民団体と名古屋市の協働事業として、市民参加のもとで事業が実施された。「名古屋ため池調査実行委員会」による調査報告書には、協働事業の経過や多くの成果が掲載されている。多くの写真のなかで、「フナを突き刺したアオサギ(2007.9.2)」に注目した。

写真3-1　フナを突き刺したアオサギ（2007. 9. 2）

東山動物園再開のレポートで話題にしたサギだ。こんな大きなサギが、自宅近くの東山周辺を飛んでいるのだ。

(2017 年 2 月 10 日)